



日記に綴られた思い

～ 佐藤新平少尉の日記を読む ～

期 間:令和元(2019)年7月20日(土)～9月24日(火)

場 所:知覧特攻平和会館(鹿児島県南九州市知覧町郡17881番地 TEL0993-83-2525)

入館料:高校生以上500円 / 小中学生300円



佐藤少尉は、
七十四年前の四月十六日、
知覧から出撃し
特攻戦死しました。
日記「留魂録」から、
その思いを読み解きます。

**出撃を控えた特攻隊員が
誰かに伝えたかったこと**

さとうしんぺい

佐藤新平少尉

戦死年月日：昭和20(1945)年4月16日

部隊名：第79振武隊

階級：少尉(戦死後の階級)

年齢：23歳

出身地：岩手県

出身期別：逓信省航空機乗員養成所

出撃基地：知覧飛行場

出撃機種：99式高等練習機

戦死場所：沖縄周辺洋上



りゅうこんろく

『留魂録』

幕末における長州藩の思想家、吉田松陰(文政13年～安政6年(1830～1859))は、幕府に捕らえられ処刑される直前、遺書『留魂録』を書き残しました。吉田松陰の『留魂録』は、松下村塾の門弟など志士たちに読み回され、思想的影響を与えました。

特攻隊員の遺品に、『留魂録』と題された日記がみられます。ここには、最期の時が迫るまでの心境や、大切な家族へあてた内容が書き記されています。吉田松陰の『留魂録』になぞらえ、何かを伝えなかったのかもかもしれません。



佐藤新平少尉筆『留魂録』(一部抜粋)

三月二十七日

待望の日は遂に来た。特別攻撃隊の一員として悠久の大義に生く。日本男児として、又、空中戦死として、之に過ぐる喜びは無し。(以下略)

お母さん江

思えば幼い頃から随分と心配ばかりおかけしましたね。腕白をしたり、又何度も不平ばかり言ったり。目を閉じると子供の頃のこと、不思議な位アリアリと頭に浮かんで参ります。(以下略)

態々長い旅をリュックサックを背負って会いに来て下さったお母さんを見、何か言うと言いが出そう、遂、わざわざ来なくても良かったの等と口で反対のことを言つて了つたりして申し訳ありませんでした。(以下略)

時世

身はたとへ 敵艦船に砕くとも

七度生きむ あかつきこころは

ありがたき 御代にうまれてやくだてる

そのよろこびに われはゆくなり

吉田松陰の時世、「身はたとひ 武蔵の野辺に朽ぬとも 留置かまし 大和魂」の一部が取り入れられています。

この企画展では、佐藤新平少尉の『留魂録』の実物資料と各ページの複製を用いて全文を紹介し、出撃を迎える日までの思いをたどります。